

次回例会

七月三十一日（日）

夕刻 5時から6時半)

『浄土真宗のみ教え』④

《真実の教え》

※真夏の夕暮れ、皆さんとご一緒に「正信偈」をお勤めしませんか。

☆ ☆

あなたが、知っていてくれる。

あなたが、聞いていてくれる。

あなたが、
じっと見てくれる。

ただそれだけで、私は、なぐさめられ、励まされる。

そうした「あなた」が

そうした「あなた」をあれば幸福。

「そうした『あなた』と得られるように――なるように――。」

「こころの掲示板」(寺川幽芳編)より

「頼む」
とは

浄土真宗の南無阿彌陀仏のみ教えは、阿彌陀さまの「ひとりばたらき」による救いの世界であり、私の方からの働きかけはまったく必要といたしません。というよりはむしろ、私の計らいが阿彌陀さまの呼び声を聞きにくくしてしまふのです。

中にも「たすけそうらえ」とある。もう一つ、御文章などでは「阿弥陀さまに「たすけとたのむ」という言い回しがよく使われます。このことから、やはり「助かるためには阿弥陀さまに頼まなければならぬのか」という疑問が湧いてきます。

もちろんこれは大きな誤解で、蓮如上人の時代（室町時代）と現在とは「頼む」の意味合いが異なることから、誤解が生じています。

現在の「頼む」は辞書に「①自分の希望するとおりにしてくれるよう相手に願う」とあるような使用の方が主ですが、ところが蓮如上人の時代では「相手の方に私の願いを聞いてくれる意志が先にある場合」に使うことが主で、相手に

全てを託すことができる時に使う言葉だったようです。現在の「頼もしい」という使い方が近いのではないのでしょうか。

このことを先代の寺川先生（寺川幽響先生）が、こんな喩え話でわかりやすくお説教して下さいました。

ある時、おばあちゃんが葉書を出そうと郵便ポストに向かつていました。いつもおばあちゃんに優しい孫が通りかかり、「葉書、ぼくが自転車を出してきてやる」と云いました。そこでおばあちゃん
は返事をします。「ほうか。ほな頼むな」と。これが蓮如上人がお使いになる「たのむ」なのです。こちらからお願いしたわけではなく、孫の方から掛けてくれた心です。しかも「本当にポストに入れてくれるだろうか？」などと少しも疑う必要はありません。すべてを任せきれる世界です。これが「たのむ」のころなのです。

浄土真宗の「たのむ一念のころ」というのも、私の方からお願いするのではなく、「任せよ」という阿弥陀さまの呼びかけに、「お任せします」と返事することにはかならないのです。住職

前号からのつづき

た、三毒の煩惱に満ちあふれた、まるで悪臭を放つ「伊蘭の木」のごとき私に、ひとたび牛頭栴檀のごときお念仏が届いて下さった時、この私が一変するのです。人間違いなく眞実報土であるお浄土に生まれさせて頂き、必ず仏と成らさせて頂けるのですが約束される身になるのです。

よっ
うて
かし
？ま
もっ
ちた
ろん
んな
そう
でし

それ
は私
の煩
悩が
無く
な

人間としての欲や、悩みや、苦しみは、人間である限りけつして無くなることはありません。

けれども、そのまんまが「正定聚不退」といわれる、正しくお浄土に生まれる仏になることが定まった仲間であり、その定まりから

がない存在である
ということです。
このような私た
ちをお釈迦様は、



「分陀利華」(蓮の花の中で最も高貴な白蓮華)と名付けて下さいます。

蓮の花は、きれいな水の
中や、水はけの良い場所に
は育ちます。

黒い汚泥の中で、その汚泥を吸収しながらも、それに汚染されることなく、純白の華を咲かせます。

も、煩惱の泥にまみれながらも、その煩惱を断つこともないままで、南無阿弥陀仏の純白の信心の花を咲かせ、お釈迦様から「分陀利華」とほめて頂

○太陽に、氷が水となる

でもまた氷と水の関係
 氷が太陽に照らされて硬
 くなる。それは氷が消えて
 水が生まれたものではありま
 せん。氷そのものが、その
 まま水と成ったのです。

無礙光の利益より
威徳広大の信をえて

かならず煩悩の

すなはち菩提の

みづとなる
このようなこと
から、親鸞聖人は



教行信証に「この生死海に
 おいて、お念仏を喜ぶこと
 は、伊蘭の林の中に梅檀が
 生じた如く、念仏三昧の功
 徳は、かくの如く、不可思
 議なる効能（はたらき）が
 ある」と述べておられま
 す。

○念仏者の姿勢

けれどもここで注意が必要なのは、「どうせ煩惱は無くならないのだから」と開き直ってはいけないことです。

そうではなく、煩悩は無
くならないが少しでも慎み
深く生活するのが念仏者の
姿勢でしょう。

私たちは煩惱のままに振る舞えば、自己中心的で、すべてを損か得か、良いか悪いかで計ろうとしてしまいます。

例え、今の世の中には経済用語があふれています。よく普通に使っています。

人は「人材」、魚は「海

「産資源」文化は、「観光資源」、学

びは「投資」、牛や豚や野菜は人間の食べ物として、



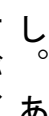
「生産物」と呼びます。
しかしこの呼び方をよくよく考えると、すべてそれだけの生命を見ることなく金額や数字で量るための呼び方です。つまり損得の世界です。

これら普通に使っている
ことからすでにおかしくな
っている」と指摘する人も
います。

○煩惱の生き方に
ブレーキを

五木寛之さんは経済活動というのはエンジンで、それをコントロールするハンドル役が政治。けれど車がエンジンとハンドルだけで走ったら、とても怖くて乗れない。やはりブレーキが必要で、その役割を果たすのが「宗教」ではないかと仰る。

念仏者の「はずべし。あ
りがたし」との生き方が、
行き過ぎた世の中
のブレーキになれ
ばと思うことです。



平成
27
年度

総会住職法話より

